

吉

野

川

お

散

歩

紀

行



今も昔も町の中心地 新町橋



庭園も見事な徳島城博物館



徳島城公園の桜



大岡川沿いの徳島藩の時代に植えられた藩政の松並木



吉野川歴史散歩 水都徳島を巡る旅

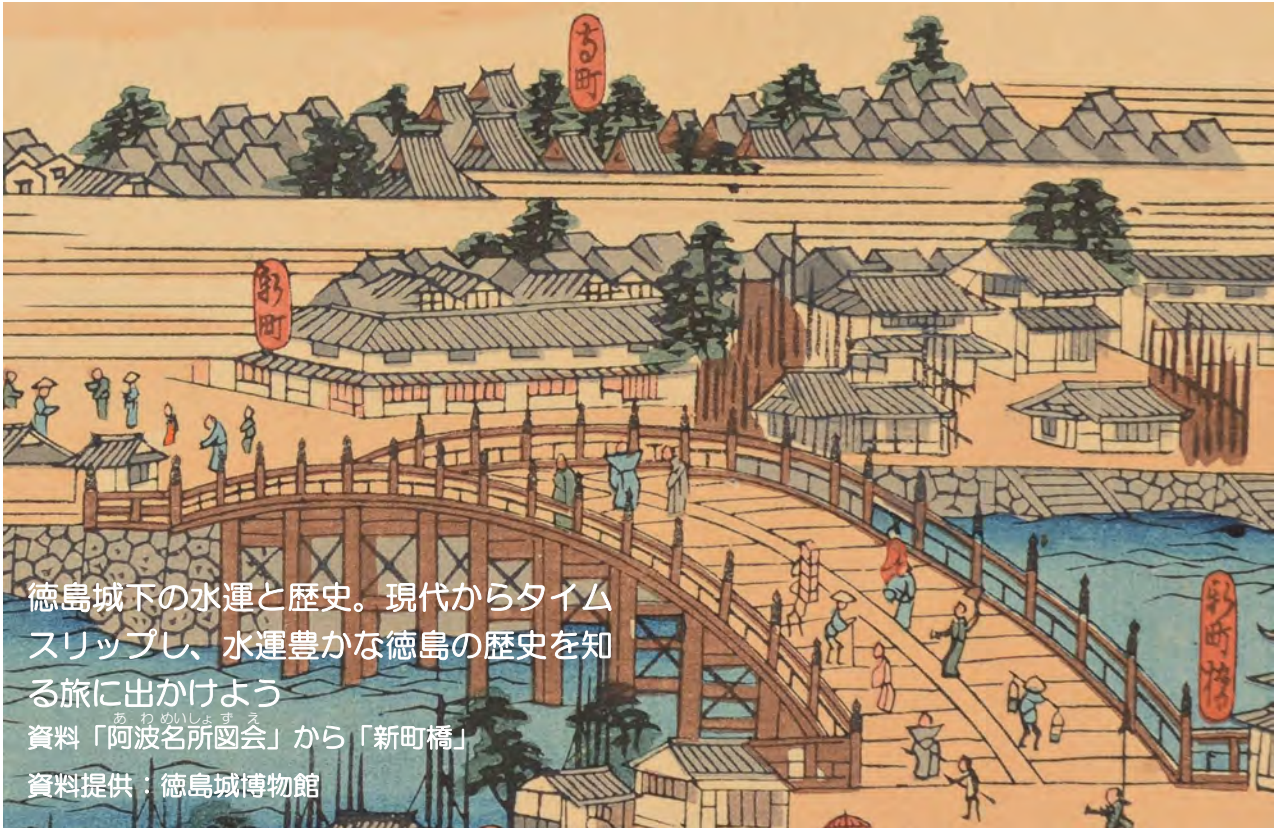


徳島市内を歩いてみると、寺島、出来島、住吉島、福島など島のついた地名の多いことに気づく。天正13年(1585)豊臣秀吉から、阿波国を与えられた蜂須賀家政は、徳島城を築くとともにその周囲に城下町を開いた。城下町徳島は、吉野川河口部にあり、大小多くの河川が乱流する中洲にできた町であったことから、このような島がついた地名が多く見られる。

網の目のように張り巡らされた河川を水上の幹線道路として活用し、城下町徳島は大いに発展した。新町川沿いに立ち並ぶ藍蔵には、吉野川流域から藩外へ出荷前の藍玉が集められ、藍市も開かれ多くの人で賑わった。まさに徳島藩の富の象徴とも言える場所であった。

また、藩主の参勤交代にもこの水運は利用された。福島橋から小舟に乗り、沖洲の沖で御座船に乗り換えて、大坂へ向かった。

このように、川と徳島藩の発展、城下町の人々の暮らしには大きな関わりがある。春の1日徳島城博物館 館長 根津 寿夫さんとともに城下町徳島を巡った。



徳島城下の水運と歴史。現代からタイムスリップし、水運豊かな徳島の歴史を知る旅に出かけよう

資料「阿波名所図会」から「新町橋」

資料提供：徳島城博物館



タブレットを持ち、色々な場所を案内していただき、水運の歴史などについて詳しく話して下さった徳島城博物館館長の根津寿夫さん。まさに生き字引だ。

徳島市は吉野川の沖積平野に発展してきた都市だ。徳島市内には大小あわせて138もの河川が流れている。

「水の豊かな地を選び、城下町を開いた。藩祖蜂須賀家政が目つけたのが水運。これにつきますね」と語る根津館長。

藩主蜂須賀家政は「^{いのつ}渭津」の地名を「徳島」と改めた。「^{しまぶしん}島普請」と言われた築堤工事をしながら城下町が開かれたが、

低地であったため、水害を受けることも度々あったという。しかし、この川の水運を活かして徳島は大発展を遂げた。新町川沿いの地名で現在も使われている「船場」「藍場浜」は、川沿いに設置された

船着き場や川湊で、河川を水上の道として利用していたことがうかがえる。新町川や助任川などは、数多くの船が行き交い、藍や多くの特産品を運び、現在の幹線道路のような役割を果たしていた。現在も、徳島市の中心部の新町川や助任川に囲まれた中洲は上から見ると「ひょうたん」のような形に見えることから「ひょうたん島」と呼ばれ、親しまれている。まさに昔から「水の都」徳島だったのだ。



新町川の両岸には、藍蔵を中心とした白壁の倉庫が建ち並んでいた。第二次世界大戦の空襲で無くなってしまったが藍蔵が建ち並んでいたことが分かるデザインが取り入れられている。



徳島城跡を公園として整備された徳島中央公園。公園の北側にある蜂須賀桜並木。ソメイヨシノよりも一足早めに咲く。

この水運に恵まれた、昔からの地形がひと目でわかるWEBサイトを徳島城博物館が作成した。平成29年4月から公開している「城下町とくしま歴史さんぽ」だ。江戸時代の古地図や、昭和初期の頃の写真も併せて楽しむことができる。外にいる時には、端末のGPS機能を使うと現在地が表示され、説明も表示される。目の前に広がる景色と比較しながら、江戸時代にタイムスリップしたような気持ちになる。歴史の勉強もでき、子どもから大人まで楽しめるWEBサイトだ。タブレットを手にした街歩きのイベントも博物館では定期的開催している。



WEBサイト用 iPhoneやiPadをお
はこれらのQR 持ちの方の、アプ
コードから。 リのダウンロード
はこちらから。

赤いピンの部分をクリックすると解
説文が表示される。
WEBサイト「城下町とくしま歴史
さんぽ」ページより抜粋。

タブレットを見ながら歴史探訪へ

出発は新町橋から

最初のスタートは新町橋から。城下町徳島の今昔が比較できる数少ないポイントの一つだ。江戸時代の旅行案内書「阿波名所^{あわめいしょすえ}図会」が、文化7年(1810)に作成された。世の中が安定し、人々の生活が豊かになった江戸時代後期には庶民の旅行ブームが沸き上がった。そこで全国各地の観光地の「図会」が作られた。現代でいう写真つきの旅行ガイドブックのような役割を果たしていたものだ。眉山と新町橋が、絵と文章、和歌で紹介されている。



資料「阿波名所図会」から「新町橋」
資料提供：徳島城博物館

新町という名前は、徳島城のすぐそばである大手口に位置する内町に対して、新しく開かれた町の意味から名付けられた。新町橋は町人地である内町と新町とを結ぶ交通の要衝、そして水上交通と陸上交通の交差点^{じょうきょう}でもあった。貞享2年(1685)の「市中町^{しちゅうまち}数並家数^{すうならびにえすう}」(阿波藩民政資料)によると、徳島城下の町人地1,588軒のうち、新町地区は718軒。城下町の約半数の人々が新町に住んでいたことが分かる。新町橋^{らんかん}の手すりや橋の欄干には飾りである擬宝珠^{ぎぼし}が付けられ、豪華で太鼓型の橋であったことも特徴だ。出水等により流されることがあったが、その度に架け直された。昔の風景が現在に残されている。



徳島駅からも歩いて数分。市の中心地に見られる眉山と「新町橋」。「水の都」の象徴である。写真は、今年、徳島城博物館で開催された「古写真ウォーク」の様子。この日もタブレットを手に古写真と古地図を眺めながら古きよき歴史に思いを馳せた。

参勤交代の道へ 徳島城下と福島を結ぶ唯一の橋 福島橋

徳島城鷲の門から福島橋に続くルートは寛永16年(1640)頃より利用された徳島藩主の参勤交代の道だった。福島橋から小舟に乗り、沖洲で御座船に乗り移り、大坂に向けて出航していた。船の漕ぎ手を「水主」といい、安宅・沖洲に約300人いた。水の流れや風を読み、船団で重要な役割を果たしていた。腕っぴしのいい屈強な男たちが選ばれ、藩による能力審査もあったという。参勤交代の船団は50~70隻もあったので、阿波・淡路両国から漁師たちを船の漕ぎ手として集めていた。彼らは「加子」と呼ばれ、水主と加子で1,500~1,700人ももの漕ぎ手が徳島藩の「海の参勤交代」を支えていた。徳島城博物館には国指定の重要文化財である千山丸せんざんまるが展示されている。現存する大名が用いた船として全国で唯一のものだ。



福島橋から徳島市中心部を眺めると、徳島城下からつながっていた道であることがよく分かる。橋がよく流された福島橋には、人柱伝説も残されている。



写真左：徳島藩御召鯨船千山丸。安政4年(1857)建造。側面に団扇などが鮮やかに描かれている。右の図：「蜂須賀家御船絵巻」資料提供：徳島城博物館

助任本町 吉野川から一直線に城とつながる道

助任本町は、内町や新町、福島町と並ぶ古い町人の町だった。内町地区の藩主の食材を扱う町（八百屋町・内魚町）が、江戸時代の始め、火災で被害を受けると、助任にも八百屋町や魚町が設けられ繁盛した。助任本町は、吉野川から一直線に徳島城に進む道である。江戸時代の初め1640年頃までは、藩主が参勤交代で使用した道であり、北上すると、当時の別宮川（吉野川）に到着した。ここには大岡六間屋おおおかるっけんやという船着場があった。明治時代の終わりに吉野川の改修が行われ、当時の面影はないが、吉野川の土手から城山を望むことができる。参勤交代の風景が、思い浮かんできた。



吉野川の堤防から南へ、助任本町を眺めた。江戸時代から残り、城山が見えるまっすぐの道だ。

【徳島城博物館へお越しの方】
 ■JR 「JR徳島駅」から徒歩約10分 ■自家用車 駐車場台数：80台
 ■バス 徳島市営バス「徳島公園前」下車徒歩約5分
 ※新町橋・福島橋・助任本町は博物館から徒歩約10分圏内



徳島城博物館

〒770-0851 徳島市徳島町城内1-8
 TEL:088-656-2525
 FAX:088-656-2466
 開館時間：午前9時30分から午後5時
 休館日：月曜日（祝祭日は開館）
 祝日の翌日（日曜・祝日は開館）
 12月28日~1月2日
 入館料(常設展示)：大人300円
 高校生・大学生200円
 中学生以下無料
 団体割引：20名以上2割引き
 ※特別展等については別料金設定有

残す・伝える・つながる
遊山箱を次世代へ



遊山箱文化保存協会
理事 島内 陽子さん



写真左、島内陽子さん。1日遊んで遊山箱が空になるとどの家でも、おかわりを詰めてくれた。遊山箱を通じて、ひとつのコミュニティがあったという。右は、島内さんのテーブルコーディネート。

ゆざんぼこ

遊山箱は小さな持ち手がついた三段のお重。壁面には、桜や野の花、鯉のぼりなど美しい絵が描かれている。春になると、子どもたちはこの遊山箱を持って野山や川などに出かけた。平成29年11月、地域密着型ビジネスなど徳島を元気にする事業プランを募集するとくしま創生アワードの壇上で、6分間の発表時間に遊山箱への思いを込めた島内陽子さん。その発表は多くの人の心を打った。

島内さんと遊山箱を結びつけたのは母だった。子どもの頃、母が話してくれた遊山箱の思い出。徳島市内の中心地に住んでいた島内さんの母は、いつも春になると、巻きずしや、いろいろを入れた遊山箱を持ち、眉山に出かけていた。母の記憶は鮮明で、その言葉のひとつひとつから、遊山に出かけるハレの日のワクワク感、いろいろを作る時の小豆を煮るにおいや巻きずしのお酢のにおいまでが伝わってきたという。すでに島内さんが子どもの時は、その風習はなかったが、遊山箱への思いは年々高まっていった。大学卒業後、テーブルコーディネートを学び講師として教室を開いている島内さん。春になると教室で使ったり、イベントを開催したこともあった。

この遊山箱の文化を残したい、遊山箱を愛する人とつながりたい。創生アワードを契機にして、かつて使われていた遊山箱を複製し新しい工夫も加えて販売している『漆器蔵いちかわ』の市川貴子さんらとともに『遊山箱

文化保存協会』を設立した。提案するのは、今の時代にアップデートした使い方だ。「楽しかったね」と思い出を語ることも大切。でもそれだけでは、遊山箱は残ってはいかない。遊山箱を作る職人さんをはじめ、かかわっている方たちがビジネスとして、成り立っている仕組みを作ることが次世代へ残すためには必要だ。そのためには、まず使ってもらうこと。春の花をいっぱい詰めて食卓に飾る。徳島産の和菓子を詰めて桜を愛でる徳島版のアフタヌーンティー。吉野川バージョン、祖谷川バージョン、県南の海バージョンがあってもいい。各地の食材を詰めれば徳島の素晴らしい食材のPRや再発見にもつながり、徳島の食文化の価値もあがる。すでに徳島県菓子工業組合や新町川を守る会と連携して、今月7日に創立イベントを開催した。

食を楽しく、食べる人の笑顔を想像しながらテーブルをコーディネートしてきた島内さん。子どもたちがワクワクしながら開けた遊山箱はどこか自分の仕事に似ていると感じるという。まだまだ手弁当の状態だが、多くの食や伝統工芸の見本市への出品を目標に、デパートのバイヤーとの商談など未来を見据えて動き出す。島内さんの挑戦は、まだ始まったばかりだ。

遊山箱文化保存協会には、ホームページがある。ぜひのぞいてほしい。

